

国衙・郡衙・古寺跡等の  
範囲確認調査概要報告書 II

平成4年度

1993・3

宮崎県教育委員会

## 序

埋蔵文化財の保護・活用につきましては日頃から深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

さて古代における地方政治の中心的役割を果たした政庁跡（国衙・郡衙）等は本県においては国分寺を除いてその位置が明確にされていませんでしたが、宮崎県教育委員会では昭和63年度から平成2年度の3か年、国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を実施しました。その結果、稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた寺崎地区一帯が国府の可能性が非常に高まるとともに国分寺でもかなりの成果があがりました。

そこで平成3年度から5か年計画で引き続き国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査を実施することになり、今年度はその2年目にあたります。

本書は、今年度行いました確認調査の成果をまとめたものです。今後の調査研究の基礎資料として各方面でご活用いただくとともに、保護啓発のための一役のとなることを期待します。

平成5年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山義孝

## 例 言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫補助を受けて、平成3年度から平成7年度の5か年に実施する国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査の平成4年度の概要報告書である。
2. 試掘調査は、第I章に示す調査組織に基づき、長津宗重が担当した。遺物の実測・拓本・トレースは押川保子・棧陽子・川崎和子・芝元泰子・杉尾愛恵・富永優子・松浦由美・山崎千恵子・大町澄子・鈴木和枝が行った。
3. 本書の執筆は、第III章を近藤協、第I・II・III章を長津が分担し、編集には長津が当たった。
4. 調査にあたっては、調査指導委員会の委員や特別調査員の先生方に御指導いただいた。また西都市教育委員会・佐土原町教育委員会をはじめ関係市町村教育委員会、県総合博物館館西都原資料館にはいろいろと御協力いただき、記して感謝する次第である。
5. 試掘調査で出土した遺物は、県総合博物館埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 本文目次

序

例言

第I章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と組織	1
第2節	調査の概要	4
第II章	試掘調査の結果	5
第1節	上妻遺跡A地区	5
第2節	上妻遺跡B地区	15
第III章	妻北小学校出土の木簡	19
第IV章	まとめ	24

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査の経緯と組織

古代における地方政治の中心的役割を果たした政庁跡（国衙・郡衙）は本県では全然調査されておらず、国分寺跡のみが昭和23年と36年に調査されているだけで、その位置は明確にされていない。また所在地の目安となる奈良・平安時代の布目瓦は県内で13ヶ所（西都市6ヶ所、佐土原町3ヶ所、宮崎市2ヶ所、えびの市1ヶ所、延岡市1ヶ所）で表採されているが、その性格は不明であり、かつその周辺は近年、都市化が進行しつつあり、滅失の恐れがでてきている。そのため、早急にその所在地と範囲を明確にし、遺跡保護のための基礎資料を作成する必要がある。よって宮崎県教育委員会では昭和63年度から3か年計画で国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を実施した。

その分布調査の結果、次のことが分かった。

第一に国府の所在地（第1図）に関しては中間台地上の稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた地区一帯の推定地D（妻～芻田）が立地や布目瓦の出土分布状況から有力な候補地として浮上してきた。また西都市教育委員会の平成2年度調査でも都萬神社の西側の畑（I地点）から軒丸瓦の出土の検出などからも補強されつつある。平成2年度に試掘調査した寺崎遺跡では方形プランの柱穴が検出され、7世紀末～8世紀後半の須恵器、畿内地方の搬入土器と思われる螺旋状の暗文を施した土師器坏蓋・身、転用硯、凸面縄目叩きの平瓦の出土から更に補強された。ただ印鑰神社の北側の推定地B（三宅）からも軒丸瓦や布目瓦が出土しており、国府の移動等を含めて可能性も残っている。しかし、沖積地の推定地C（右松）・D'（妻～芻田）は立地的に困難であり、推定地から除外しても問題ないと思われる。

第二に国分寺については平成元年の試掘調査では主軸が東西方向の2間×5間以上の掘立柱建物が検出され、「僧房」と推定されており、伽藍配置の一部が明らかにされた。

第三に国分寺跡・寺崎遺跡で出土している凸面横縄目叩きの平瓦と須恵器は、佐土原町教育委員会が平成元年度に試掘調査を行った下村窯跡（佐土原町）で生産された可能性が高まった。

3か年の遺跡詳細分布調査の結果、国分寺と印鑰神社に挟まれた尾筋地区一帯よりも稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた寺崎地区一帯が国府の可能性が非常に高まるとともに国分寺でもかなりの成果があがった。そこで当教育委員会では平成3年度から5か年計画で国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査を実施することとなった。

初年度である3年度は東限を把握するために上妻遺跡のI地点から南へ100mに位置する都萬神社の西側の畑を調査した結果、方形プランの柱穴は検出されたが、掘立柱建物は復元できなかった。また斜格子目叩きの瓦と共に横縄叩きの瓦が出土したが、平成2年度調査の寺崎遺跡に比較すると出土量が圧倒的に少ない。出土した須恵器は撮みを有する坏蓋のかえりの喪失と高台付碗の高台の特徴から8世紀後半を主体とする時期に比定され、下限は布痕土器と土師器の高台付碗から10世紀前半の時期である。転用硯は1点だけで、須恵器の撮み付坏蓋を利用している。また北限を把握するために西都市教育委員会の試掘調査によって凸面横縄叩きの平瓦が出土したAa地点（童子丸遺跡の一角）より北東部を3か所調査したが、古墳時代の竪穴住居跡が検出されただけで、国府関係の遺物・遺構は検出されなかった。よってAa地点を国府の北限とするかについては確定できなかった。

2年度である4年度は西都市教育委員会が調査して複弁12葉蓮華文軒丸瓦が出土し、格子目瓦が主体であるI地点（上妻遺跡の一角）の周辺を調査することとなった。なお、国府推定地の西側の部分の試掘調査については諸般の事情で見送らざるをえなかった。

## 調査組織

### 調査主体

#### 宮崎県教育委員会

教育長	高山 義孝
教育次長	安田 天祥
教育次長	宮路 幸雄
文化課長	甲斐 教雄
課長補佐	串間 安圀
庶務係長	税田 輝彦
主査	巻 庄次郎
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫

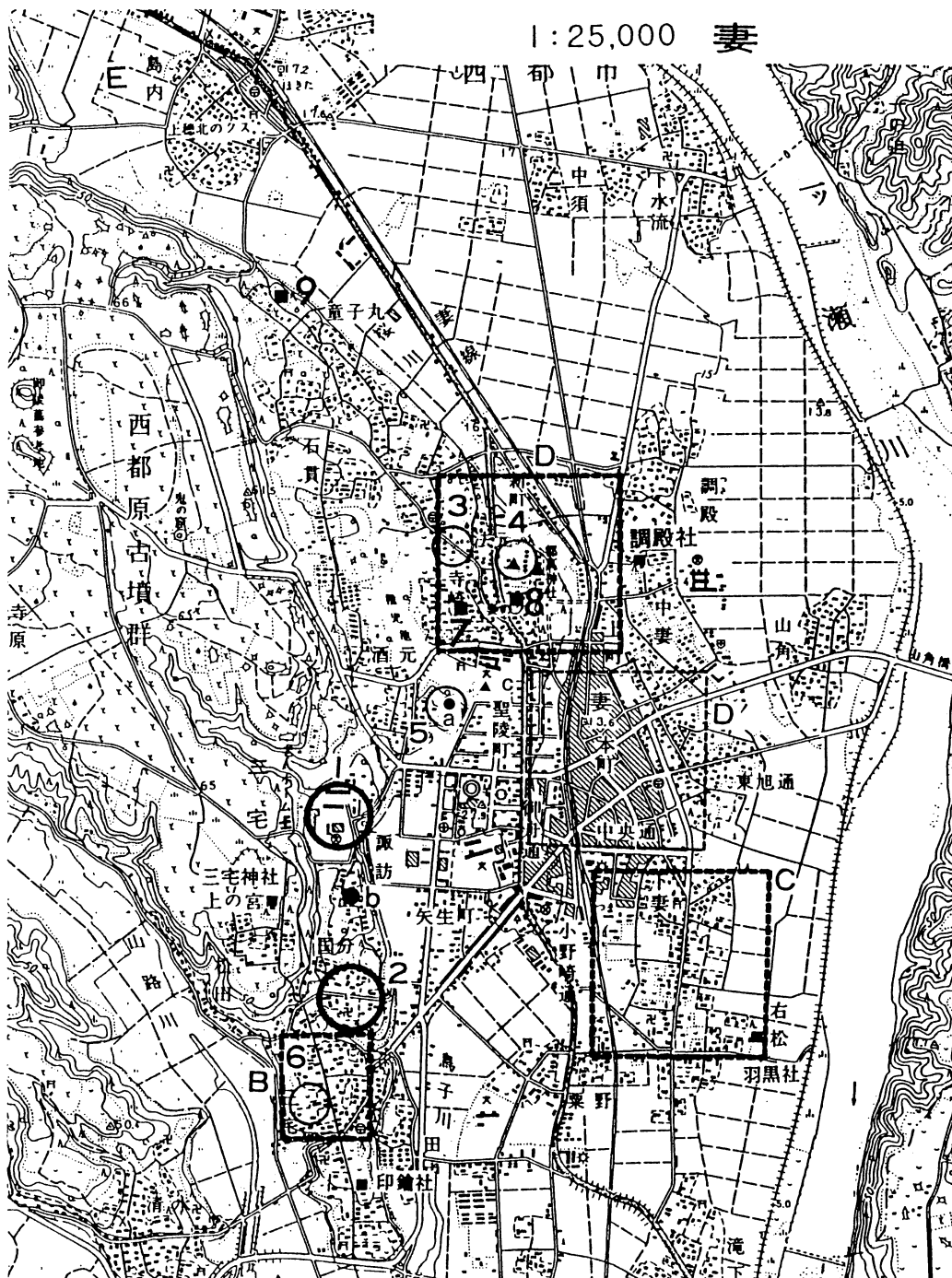
#### 関係市町村教育委員会

### 指導監督

文化庁記念物課文化財調査官	西田 健彦
---------------	-------

### 調査指導委員会

福岡大学人文学部教授	小田 富士雄
奈良国立文化財研究所主任研究官	山中 敏史
宮崎県文化財保護審議会会長	野口 逸三郎



- B三宅 C右松 D妻～勿田 E島内 (B～E国府推定地) 1.国分尼寺推定地(諏訪遺跡) 2.国分寺跡  
 3.寺崎遺跡～法元遺跡 4.上妻遺跡 5.酒元遺跡 6.上尾筋遺跡 7.寺崎遺跡(平成2年度試掘調査)  
 8.上妻遺跡(平成3年度試掘調査) 9.童子丸遺跡 a.児湯郡印出土地 b.石帯出土地 c.木簡出土地  
 10.上妻遺跡A地区 11.上妻遺跡B地区 ▲平成4年度試掘調査

第1図 日向国府推定地位置図

西都市西都原古墳研究所長	日 高 正 晴
宮崎県県史編さん室長	永 井 哲 雄
宮崎県立宮崎北高等学校教諭	阿 萬 美 水

#### 調査員

県文化課埋蔵文化財係主査	長 津 宗 重
県史編さん室主事	日 高 孝 治
県総合博物館主任主事	近 藤 協
西都市教育委員会社会教育課主事	菱 方 政 幾
佐土原町教育委員会社会教育課主事	木 村 明 史

#### 特別調査員

鹿児島ラサール高等学校教諭	永 山 修 一
佐賀大学教育学部教授	日 野 尚 志

## 第2節 調査の概要

5か年計画の2年目である平成4年度は9月に作物調査を実施した。

まず平成2年度の西都市教育委員会による試掘調査で複弁12葉軒丸瓦が出土したI地点より北西側のA地区と北東側のB地区の試掘調査を10月19日～平成5年3月31日に行った。

A地区では等間隔に3m×10mのトレンチを12本設定して調査した結果、南側のT-7～9ではほぼ東西方向に伸びる溝状遺構が検出され、そこから単弁8葉蓮華文軒丸瓦が出土した。特にこの軒丸瓦は金剛宝戒寺（大分市）と同範の可能性がある。平瓦は凸面格子目叩きが主体であり、凸面縄目叩きはわずかである。出土した須恵器は7～8世紀後半の時期を主体としている。なお弥生時代・古墳時代の竪穴住居が数軒検出されている。

一方、B地区では3m×10mのトレンチを東西方向に3本設定して試掘調査した結果、中央部のT-2から方形ピットが検出され、石帯が出土したので、拡張した。平瓦はA地区と同様に凸面格子目叩きが主であり、凸面縄目叩きはわずかである。出土した須恵器は8世紀後半を主体としている。調査の目的である奈良・平安時代の掘立柱建物は検出されなかった。なお古墳時代の竪穴住居、近世の溝状遺構・柵列が検出された。

調査指導委員会は平成5年3月24日に開催し、調査の方法及び成果の評価について指導・助言を受けた。また平成5年3月16日～17日に特別調査員として永山修一氏に文献を踏まえた指導を、同年3月16日～17日に特別調査員として日野尚志氏に西海道の国府を踏まえた指導を頂いた。

## 第Ⅱ章 試掘調査の結果

### 第1節 <sup>かみづま</sup>上妻遺跡A地区

#### 1. 調査区の設定と概要

上妻遺跡は行政区では西都市大字妻字上妻に所在する。一ツ瀬川右岸に広がる沖積平野部に位置する国府推定地Dで、日向国分寺の北東約1.8kmに位置し、標高20mである。この国府推定地の中には寺崎遺跡・法元遺跡・上妻遺跡が含まれており、この3遺跡からは布目瓦が出土している(第3図)。なお平成2年度に西都市教育委員会が調査して複弁12葉軒丸瓦が出土したI地点からは北西に約10m離れている(第2図)。

平成4年10月19日～平成5年3月31日に行われた調査では3m×10mのトレンチを等間隔に南北方向に12本設定し、試掘調査を行った。その結果、今回の調査の目的である奈良時代の遺物としては平瓦は凸面格子目が主体であり、凸面横方向縄目叩きはわずかである。特に単弁8葉蓮華文軒丸瓦が出土したことが特筆される。出土した須恵器は7～8世紀後半の時期を主体としている。須恵器の中には転用硯は出土したが、硯・墨書土器は出土していない。当時期の遺構としてはほぼ東西方向に伸びる溝状遺構が検出されたが、方形プランの掘り方の柱穴が検出されなかった。他の時期の遺構としては弥生時代の竪穴住居1軒・古墳時代の竪穴住居1軒が検出された。他の時期の遺物としては、縄文時代後・晩期の土器、打製石斧、弥生時代中・後期の土器、古墳時代の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・布痕土器、鎌倉時代の青磁・石鍋などが出土した。

#### 2. 包含層の状態

当遺跡の基本層序は第Ⅰ層が褐色土層(Hue7.5YR 4/3・表土)、第Ⅱ層が黒色土層(Hue7.5YR 2/1)、第Ⅲ層が明褐色土層(Hue7.5YR 5/6)、第Ⅳ層が橙色土層(Hue7.5YR 6/6)である。遺物は第Ⅱ層から瓦・須恵器・土師器等が出土している。

#### 3. 奈良時代の遺構と遺物

##### (1) 遺構

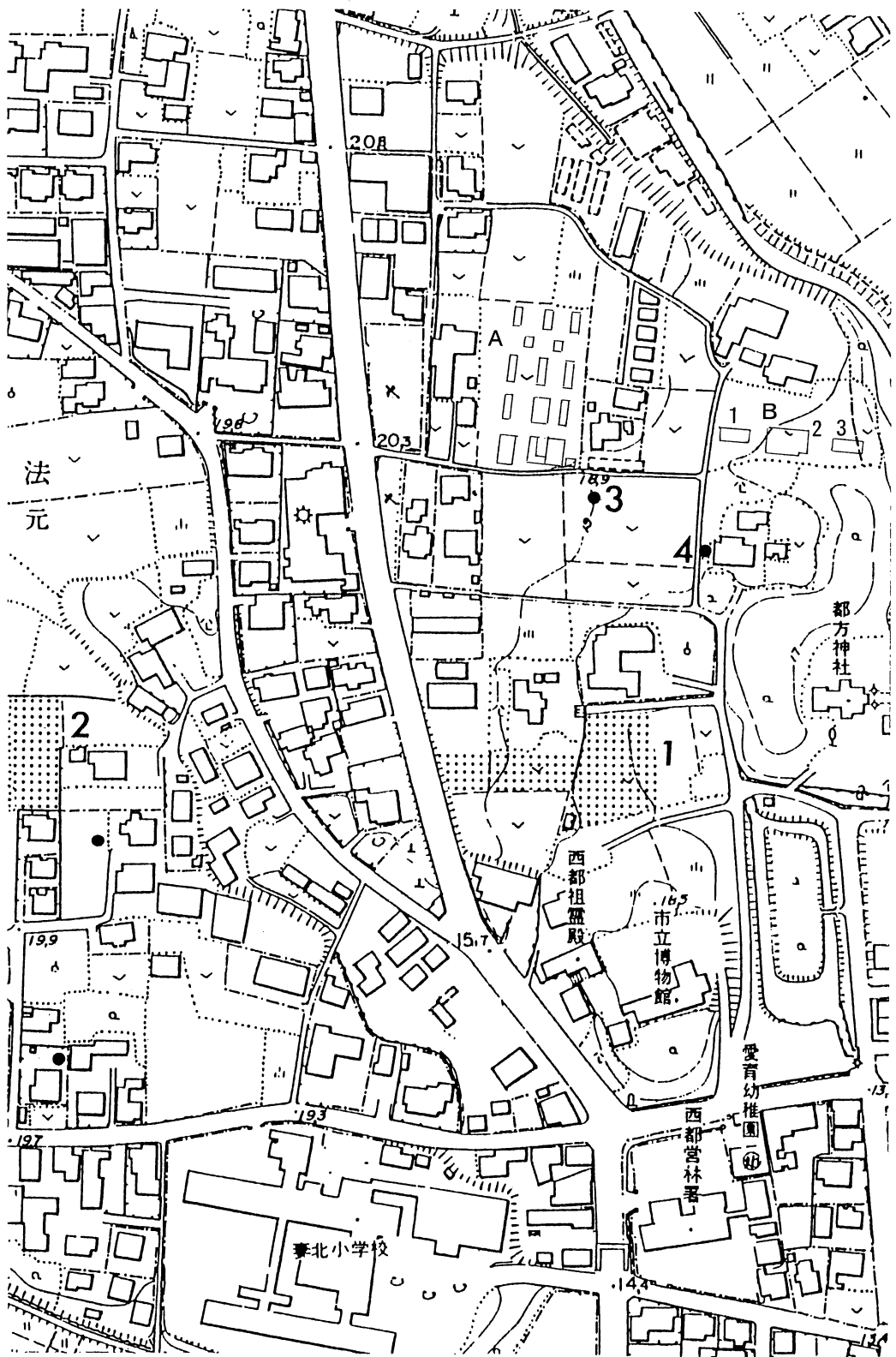
柱穴はT1～T21で柱穴が検出されたが、掘立柱建物が完全に復元されるのではない。

幅96cm、深さ70cmの溝状遺構(SE1)がほぼ東西方向に走っているのがT-7～9で検出された。埋土から7世紀から8世紀にかけての遺物が多数出土した。

##### (2) 遺物

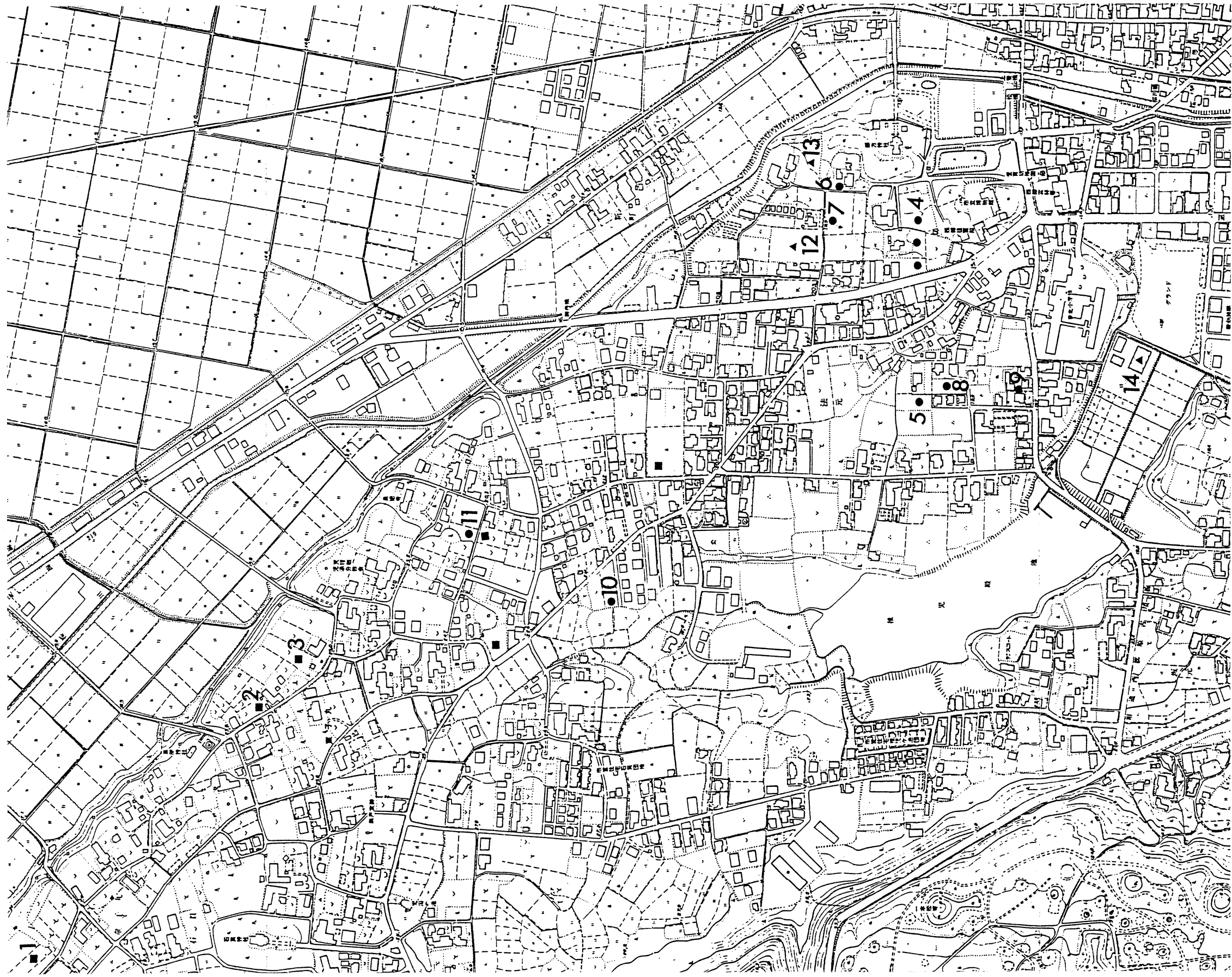
当遺跡ではSE1で軒丸瓦が出土したが、軒平瓦は全然出土していない。当遺跡出土の瓦





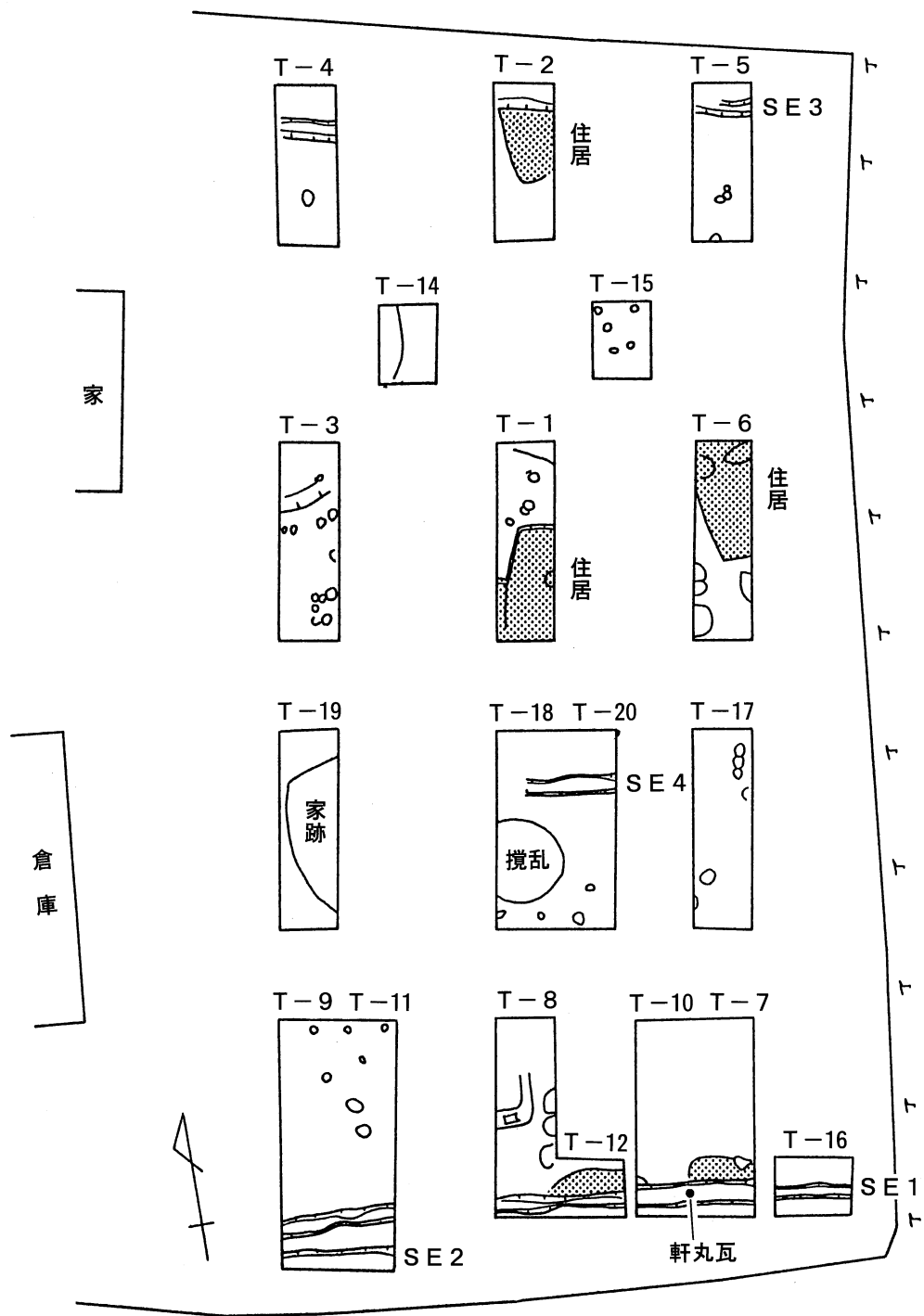
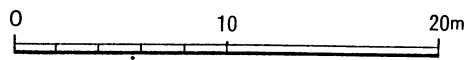
1.上妻遺跡第1地点 2.寺崎遺跡(平成2年度調査) 3.I地点(西都市教委調査) 4.格子目瓦表探地点  
 A.上妻A地区 B.上妻B地区

第2図 上妻遺跡試掘地点位置図



- 1~3 童子丸遺跡試掘地点 (平成3年度試掘)
- 4 上妻遺跡 (平成3年度試掘調査)
- 5 寺崎遺跡 (平成2年度試掘調査)
- 11 Aa地点 (西都市教委調査)
- 13 上妻遺跡B地点
- 7 I地点 (西都市教委調査)
- 8・9 J地点 (西都市教委調査)
- 10 K地点 (西都市教委調査)
- 12 上妻遺跡A地点
- 14 本簡出土地点

第3図 発掘調査地点 (トレンチ) 位置図 ■ 試掘地点 ● 瓦出土地点 ▲ 平成4年度調査



第4図 トレンチ配置図

を凸面の叩きと凹面の調整によって分類した寺崎遺跡の分類にあてはめて説明する。

### 1. 軒丸瓦（第5図1～3）

1～3は単弁8葉蓮華文の軒丸瓦で同一タイプであるが、別固体である。1・2は外区を欠如しており、3が無文の外区である。内区の中房の蓮子は1+8+14で、1は蓮弁が6葉遺存している。この軒丸瓦の大きな特徴は外区の下側が内側に張り出すことである。

### 2. 平瓦（第5～7図）

#### 第I類 格子目叩き

格子目叩きには斜格子のa類と正格子のb類がある。a類が主である。

#### a 斜格子目叩き（第5図4・第6図5～10）

4～10は斜格子の一辺長が8～10mm×9～12mmである。凹面の調整はへら削りのタイプ（4～7）と桶巻き作りの布目痕を残すタイプ（8～10）に分かれる。4のみが側面の凹面側を面取りしているのに対して、他は行っていない。

13は一辺長が6mm×8mmと小形の格子であり、凹面に布目痕を明瞭に残す。

#### b 正格子目叩き（第7図12）

12は一辺長が10mm×10mmの格子目叩きの上から一部ナデ消している。凹面には斜方向の布目痕を残している。

#### 第II類 縄目叩き（第7図15～17）

縄目叩きは5cmあたりの縄目の条数を計測し、13条以下を粗縄目、14条以上を精縄目とすると、精縄目（15・17）と粗縄目（16）である。縄目の叩きの方向は斜方向（15・17）と横方向（16）で、縦方向はない。

#### a 斜精縄目（第7図15・17）

15・17とも凸面の縄目は15条で、凹面には布目痕を明瞭に残している。17は両面との一部ナデ消している。焼成は良好で、色調は灰色である。

#### b 横粗縄目（第7図16）

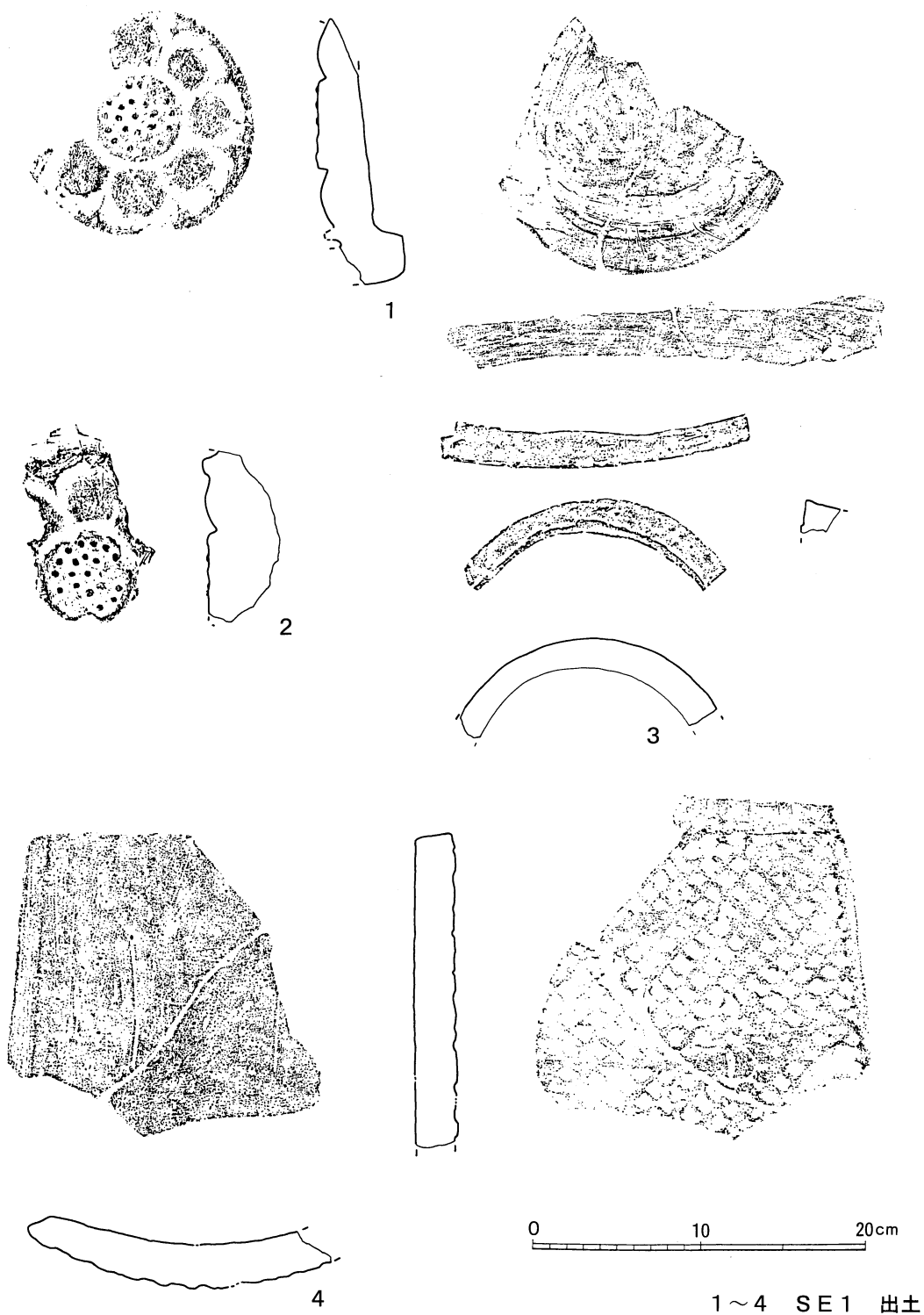
16の凹面は布目痕を明瞭に残している。側面の断面は凹面側を面取りしている。焼成はやや軟である。

### 2. 丸瓦

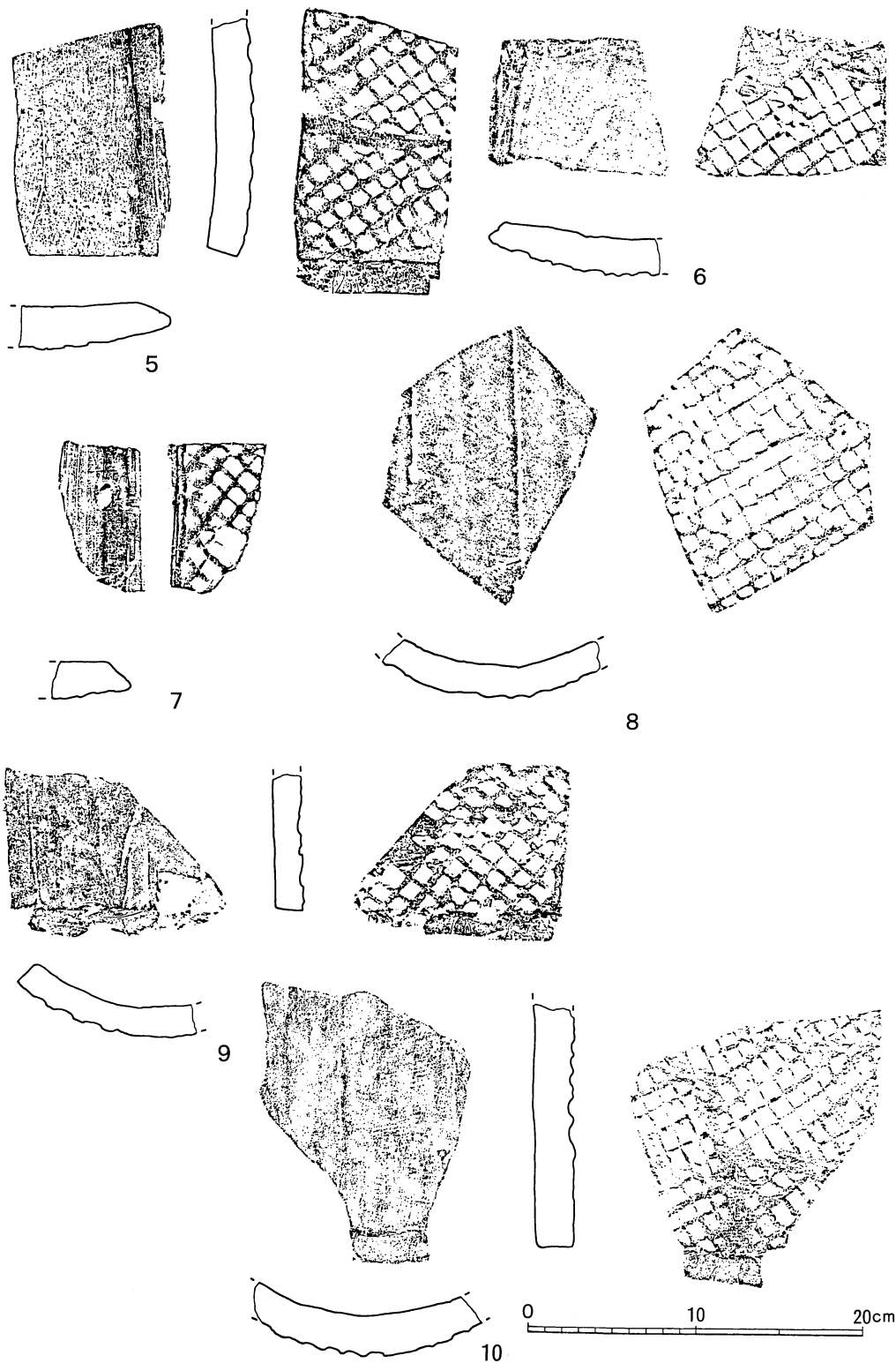
丸瓦は玉縁式のもの（18）があり、凸面の調整は格子目叩き（11・14）とナデ（18）である。14は6mm×6mmと小形の格子であり、凹面には布目痕をのこすが、焼成はやや軟である。

### 3. 須恵器（第8図）

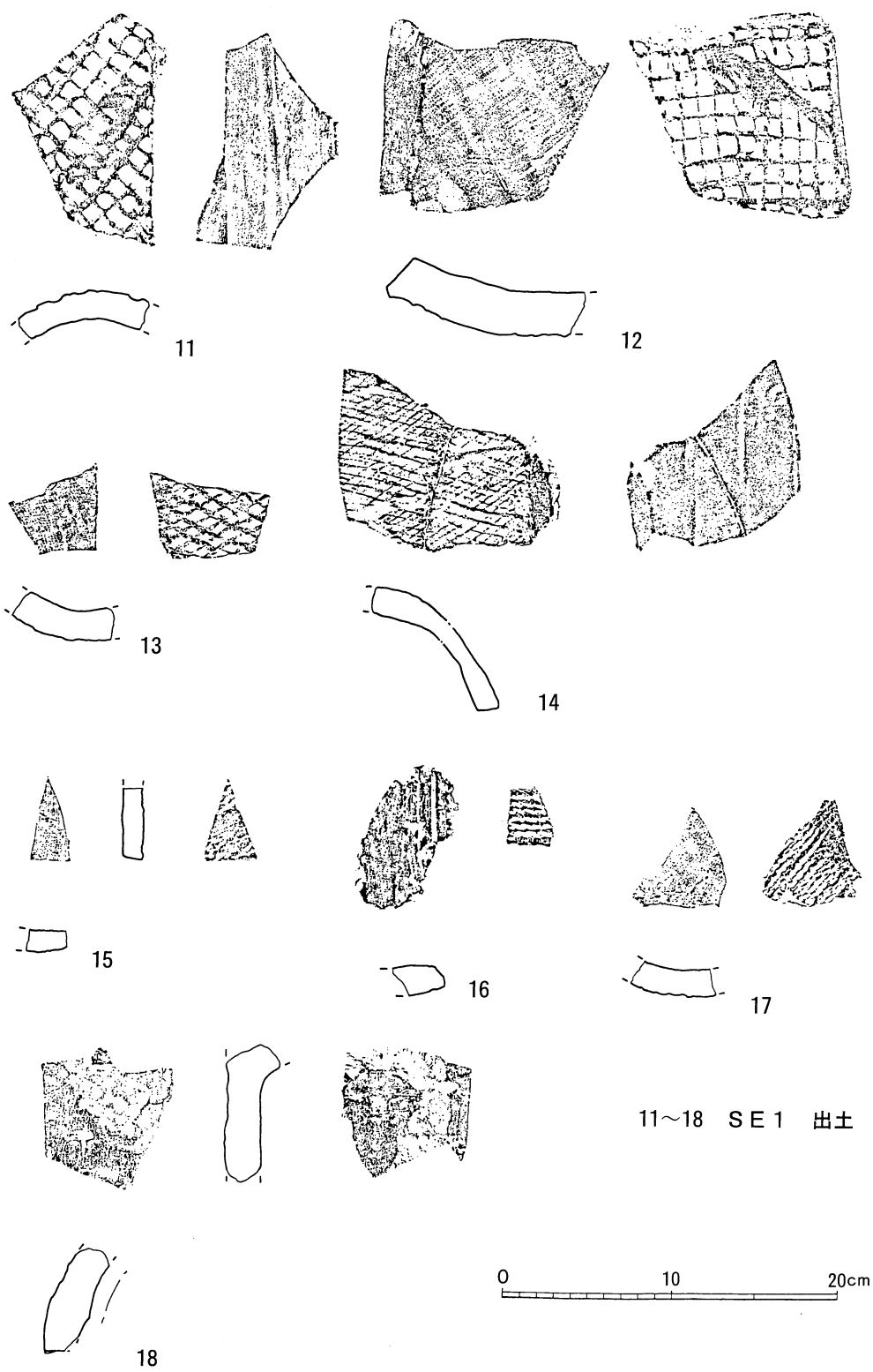
#### 坏蓋（第8図1～6）



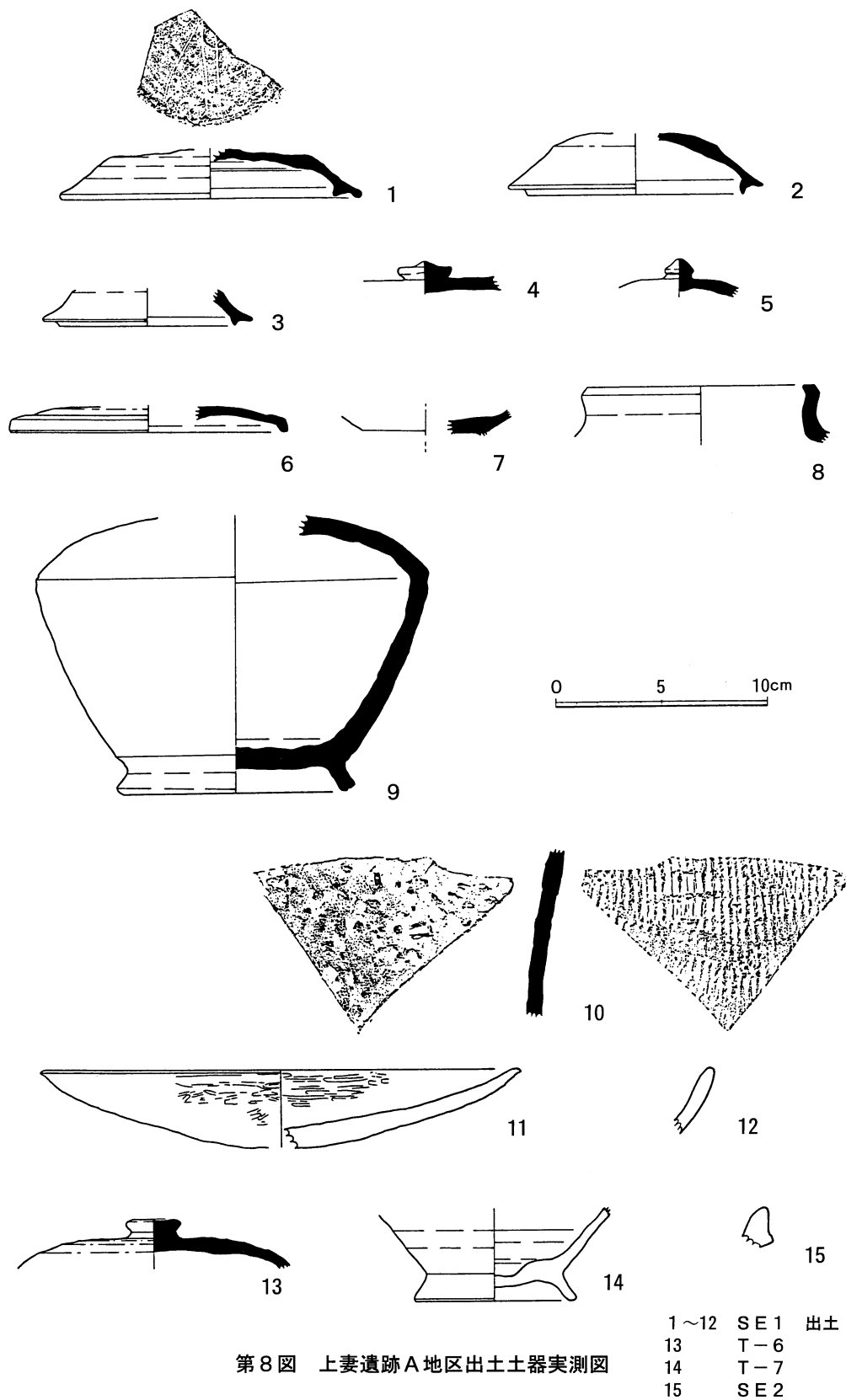
第5图 上妻遺跡A地区出土瓦実測図(I)



第6图 上妻遺跡A地区出土瓦実測图(II)



第7图 上妻遺跡A地区出土瓦実測図(Ⅲ)



第8图 上妻遺跡A地区出土土器実測图



1～3がかえりを有するのに対して、6はかえりを喪失し、端部が下方に屈曲する。1の天井部には3本のヘラ記号を施している。4・5の撮みは4が扁平であるのに対して、5は宝珠形である。

#### 長頸壺（第8図9）

9は胴部最大径が肩部の上位にあり、底部は斜め下方に伸びる高台を有する。

## 第2節 上妻遺跡B地区

### 1. 調査区の設定と概要

上妻遺跡B地区は行政区では西都市大字妻字上妻に所在し、A地区の東約40mである。一ツ瀬川右岸に広がる沖積平野部に位置する国府推定地Dの東端部である。なお平成2年度に西都市教育委員会が調査して復弁12葉軒丸瓦が出土したI地点からは北東に約30m離れている。

平成4年10月19日～平成5年3月31日に行われた調査では3m×10mのトレンチを等間隔に東西方向に3本設定し、試掘調査を行った。その結果、T-2で方形ピットが検出され、石帯が出土したので、周辺を拡張した。平瓦は凸面格子目が主体であり、凸面横方向縄目叩きはわずかである。出土した須恵器は8世紀後半の時期を主体としている。須恵器の中には転用硯が出土したが、硯・墨書土器は出土していない。当時期の遺構の可能性のある方形ピットは掘立柱建物としては復元できなかった。ほぼ東西方向に伸び、途中で直角に曲がる溝状遺構（SE1）が検出されたが、染め付け等の陶磁器が出土しており、近世の時期に比定される。このSE1に平行する柵列が1条検出された。他の時期の遺構としては古墳時代の竪穴住居1軒が検出された。他の時期の遺物としては、縄文時代後期の土器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良・平安時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の青磁、近世の染め付けなどが出土した。

### 2. 包含層の状態

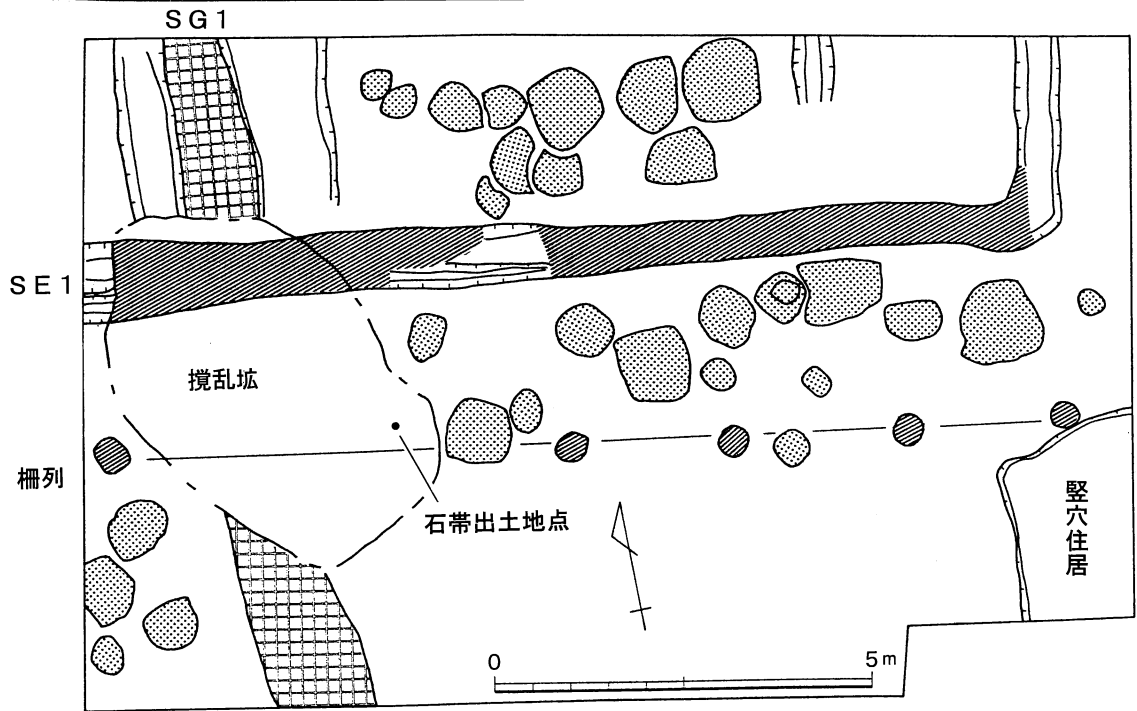
当遺跡の基本層序は第I層が褐色土層（Hu e7.5YR 4/3・表土）、第II層が明褐色土層（Hu e7.5YR 5/6）、第III層が橙色土層（Hu e7.5YR 6/6）であり、包含層の黒色土層は削平されている。遺物は第I層から瓦・須恵器・土師器等が出土している。

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 遺構

ピットがT2・4～9で柱穴が29個検出され、その中に一辺90cmの方形プランのピットもあるが、掘立柱建物が完全に復元されるものはない。

小砂利を敷きつめた幅95cmの道状遺構（SG1）がほぼ南北方向に伸び、両側に溝状遺構を付帯している。幅55cm、深さ26cmの溝状遺構（SE1）はほぼ東西方向に伸び、途中で直



第9図 B地区遺構分布図

角に北に伸びる。SE 1の南240cm離れて柱間230cmの柵列が平行に走る。遺構の切り合い関係はSG 1→攪乱坑→SE 1である。

(2) 遺物

当遺跡では軒丸瓦・軒平瓦は全然出土していない。当遺跡出土の瓦を凸面の叩きと凹面の調整によって分類した寺崎遺跡の分類にあてはめて説明する。

1. 平瓦 (第10図)

第I類 格子目叩き

格子目叩きは斜格子のa類のみである。

a 斜格子叩き (第10図1~8)

1~4は斜格子の一辺長が7~10mm×8~10mmである。凹面の調整は布目痕の上からヘラによるナデを施し、側面の凹面側を面取りしている。布目の経緯数は2が36×36本、3が33×33本である。1・2・4の焼成はやや軟である。

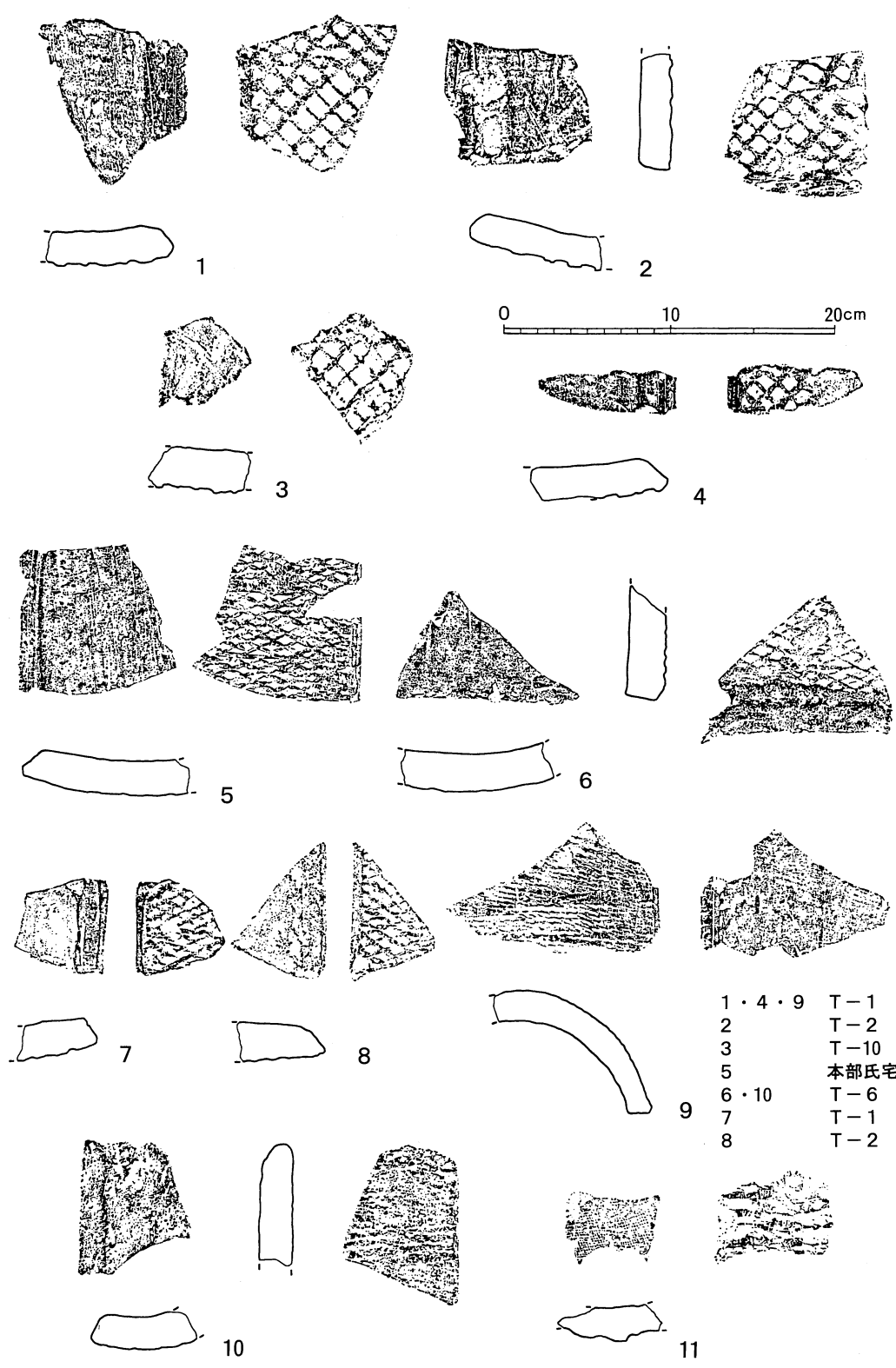
5~8は一辺長が5~6mm×6~7mmと小形の格子であり、6・7は凹面に布目痕を明瞭に残す。側面の凸面側を面取りしている。5・6の焼成は良好である。

第II類 縄目叩き (第10図10・11)

10・11とも粗縄目である。縄目の叩きの方向は横方向のみで、11の凹面は横縄叩きの上に布目痕を残している。側面の断面は凹面側を面取りしている。

2. 丸瓦 (第10図9)

9の凸面の調整は横縄目叩きで、凹面は布目痕の上からナデ消している。側面の凸面側を面取りしている。焼成は良好で、灰黄色(2.5Y 7/2)である。



- 1 · 4 · 9 T-1 SE1 出土
- 2 T-2 SE1
- 3 T-10
- 5 本部氏宅表探
- 6 · 10 T-6
- 7 T-1
- 8 T-2

第10图 上妻遺跡B地区出土瓦実測图

3. 須恵器 (第7図)

高台付碗 (第11図1~5)

1は直線的に開く体部で、口縁部付近で途中から外反する。体部と底部の境に高台がつく碗で、口径11.4cm、器高4.9cm、底径7.2cmである。2は体部と底部の境に断面凹気味の高台がつく碗で、内面を転用硯にしている。3も内面を転用硯にしている。底径は2が9.4cm、3が9.7cm、4が7.2cmである。

蓋 (第11図6)

T-1のSE1出土の6は高い撮みのすぐ側に取り手を有しており、壺か高杯の蓋と思われる。

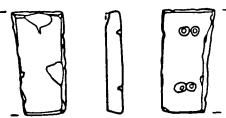
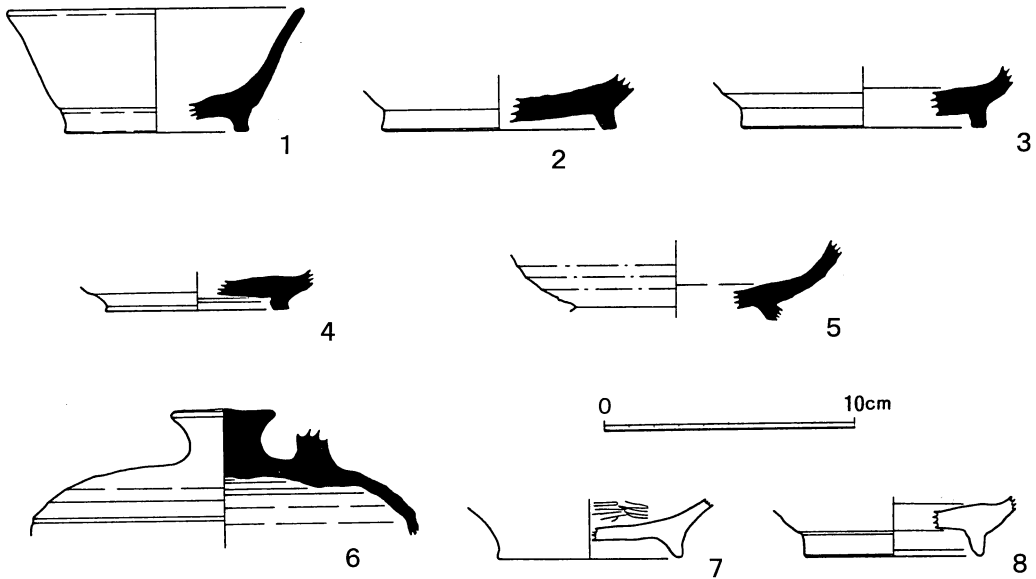
4. 土師器

高台付碗 (第11図7・8)

T-1出土の7は横・斜め方向のへら磨きを施した内黒土器である。細目の短い高台で、底径は7.4cmである。T-1のSE1出土の8は内外面ともナデを施しており、底径は6.9cmである。

5. 石帯 (第12図)

T-2の攪乱墳出土の石帯は四隅に二孔を一对とする潜り孔を平行にあげ、長方形孔がない巡方である。帯幅が一辺4.0cm、厚さ0.5cmであるが、半分欠如している。断面は台形であるが、潜り孔は貫通していない。石材は蛇紋岩系である。



第12図 石帯実測図

第11図 上妻遺跡出土土器実測図

1・2・6・8	T-1	SE1	出土
3・7	T-1		
4	T-2		
5	T-3		

## 第Ⅲ章 <sup>つまきた</sup>西都市妻北小学校出土の木簡

### 第1節 はじめに

この章では、国衙等古代政庁遺跡の関連資料として、昭和48年に出土し西都原資料館に所蔵されて以来、報告されることのなかった木簡等、西都市妻北小学校出土遺物について紹介する。

### 第2節 出土の経緯

この資料は、西都市妻北小学校プール建設工事中（昭和48年）に出土している。（出土地点は2図参照）発見は、建設予定地を重機によって掘削中のオペレーターの採集になるもので、表土下約1.2mの黒色土層中からの検出であった。木器の残りがよいこと、土器断面に残るシルト質土と土砂からグライ化の著しい土層中に含まれていたものと思われる。これらのことから、遺物は溝状遺構等なんらかの遺構の一部を断ち切ったために出土した可能性が高いと推定している。なお、最寄りの遺跡には、南北約200mに児湯郡印の出土推定地がある。

### 第3節 出土遺物

上記の経緯によって採集された遺物は、木簡、その他の木製品、須恵器、土師器など細片を合わせて48点である。木簡、木製品は、出土時点の水分を多量に含んだ状態から、一転して乾燥した状態にあるのもかわらず、水分蒸発に伴う膨張などの自破壊もなく比較的安定した状況を保っている。ここでは、木簡など、主な出土遺物について簡単に紹介する。

#### (1) 木簡（第12図）

出土した木簡は、体部の片側縁を欠き、裏面は二次的に火をうけて損傷しているが、全形を窺うことのできるもの。両側面に木簡特有の切り込みを入れ、全幅のまま端部にいたる典型的な形状である。端部は、丹念に削られて、弧状を呈する。型式は6023型となる。全長は、11.2cmで荷札木簡としては短いもの。全幅は2.3cm、最大厚は0.5cmである。表面には、柾目が細かく通っている。裏面は、二次的に火を受けたとおもわれ、切り込みから下の体部のほとんどが炭化している。なお、墨書はほとんど消えて判読できないが、切り込み部真下に一文字、さらに下部に一、ないし二文字がみられる。なお、炭化した一方を、文字の書かれた面に対して裏面としたが、末端部の切り口の処理からみて、あるいはこちら側が表面の可能性もある。炭化した裏側にも、赤外線装置をかけているが、文字の有無を明らかにすることはできなかった。材質はスギ材である。

その他の木製品として、現存長11.7cm、全幅3.9cm、最大厚0.4cmを測る長方形で、一端に孔が穿がたれた痕跡がのこる木筒様の木片、直径5.2～6.2cm、厚さ0.7cmの楕円形で、周縁ちかくに二対の径約0.7cmの小孔をもつ木製品、全長22.7cm、最大幅2.6cm、厚さ0.5～1.4cmを計測するへら状、あるいは笏状を呈する木製加工品、先端を尖らせた木杭状の製品がある。

## (2) 須恵器

出土した須恵器には、墨書のある蓋坏、皿、甕、6点がある。

### ① 墨書文字のある蓋坏（第14図5）

外天井部のつまみ近くに「真」の墨書文字がみられる蓋坏である。扁平なつまみ部は1/2体部は約1/4遺存している。口縁は、やや尖り気味に短く張り出している。天井部は比較的高く丸みをもつ。外天井部は回転へら削り調整である。細かいナデ調整の内側には、明褐色のニカワが凝固したような付着物がみられる。

## (3) 土師器

出土した土師器には、坏、高台付碗、甕片21点である。

### ① 坏

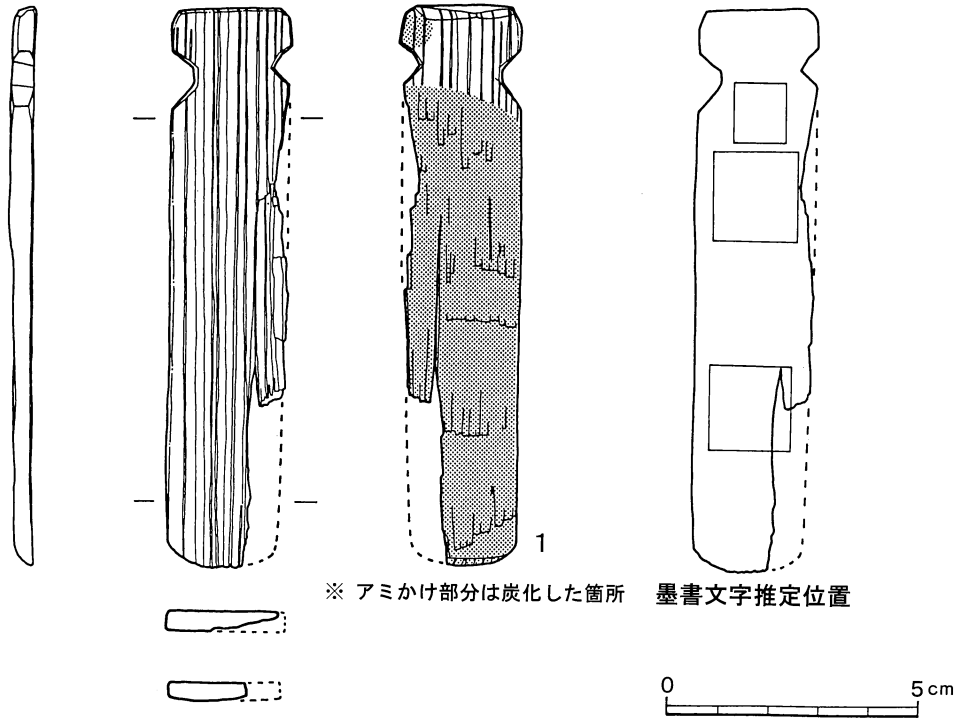
坏は、破片が主である。底部片8点のうち、糸切り離し底が1点、ほかはすべてへら切り離し底である。

### ② 高台付碗

高台付碗は6点出土している。高台内に墨痕があり、転用硯と推定されるもの（第14図11）、同じく高台内に渦巻き状の整形痕がみられるもの（第14図12）、高台にちかい腰部に鋭利な器具で刻されたとおもわれる4～5状の線刻の一部がみられるもの（第14図15）、などがある。線刻は、「小瀬戸遺跡」（鹿児島県始良郡始良町）出土の坏に「仲家」、「伴家」と刻された例などから刻書文字の一部とも推定できる。

### ③ 甕片

輪積成形痕の観察できる破片、タタキ調整痕のある胴部片、丸底の底部など5点が出土している。



※ アミかけ部分は炭化した箇所 墨書文字推定位置

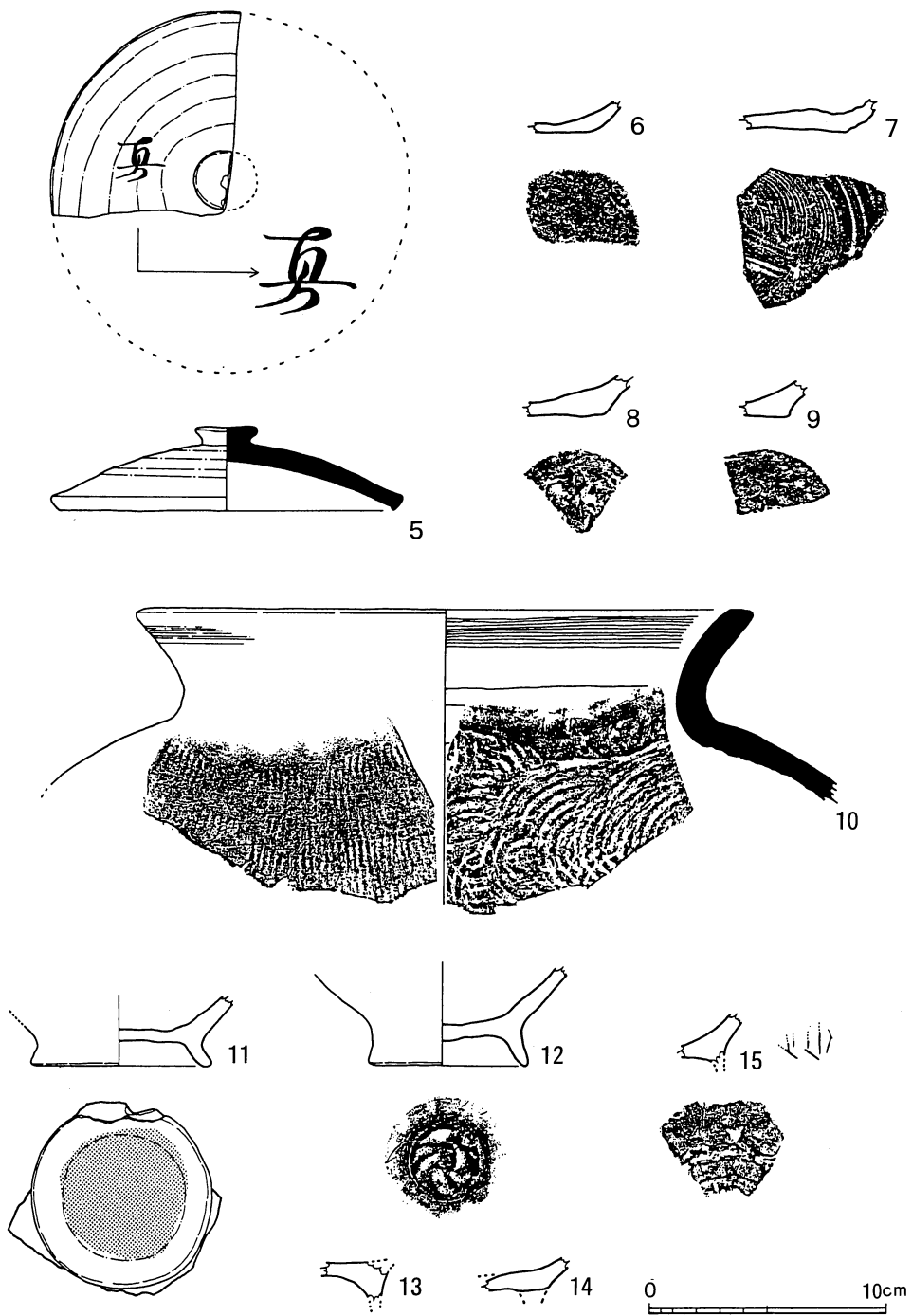
第13図 木簡実測図

#### 第4節 まとめ

日向国関連の木簡といえば、すでに26年前、平城宮跡第44次調査（1967年）で検出された「日向国牛皮四枚」（長19.1cm、幅2.6cm、厚0.6cm）、「日向国牛<sup>〔皮カ〕</sup>□□」（長14.9cm、幅2.6cm、厚0.5cm）と牛皮の貢進が記載された2枚の木簡がよく知られている。今回報告した木簡は、墨書の判読は不可能であったが、はじめて確認された日向国内出土の木簡という意味で、貴重である。形状は、上部の両側面に切れ込みをもつ典型的な6023型であった。また、量的に数少ない出土遺物の中にあつて、墨書土器、刻書土器、転用硯が含まれていることや、木簡の片面が二次的に火を受けて炭化していることなど時間的、空間的な周辺状況が推し量られ、まさに日向国政庁の一角を始めて具体的に表象する資料であるといえる。

なお、墨書須恵器の墨書文字判読については岩切悦子氏（宮崎県立図書館）に、赤外線装置による木簡の墨書文字判読に館野和己氏（奈良国立文化財研究所）の、それぞれご助言をいただいた。

また、本遺跡出土遺物の詳細については、宮崎県総合博物館研究紀要18輯を参照されたい。

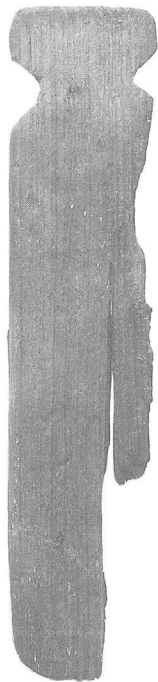


第14図 須恵器・土師器（坏・高台付碗）





炭化した面



墨書のある面



側面

木 簡



「真」の墨書きのある蓋坏



裏面（付着物がみられる）

#### 第IV章 まとめ

昭和63年度から平成2年度の3か年にわたって行われた国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査の結果を踏まえて、平成3年度から5か年計画で実施する国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査の2年目に当る。

本年度は中間台地上の稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた地区一帯の国府推定地D（妻～芻田）内で、西都市教育委員会の調査によって都萬神社の西側の畑から軒丸瓦が出土したI地点<sup>(1)</sup>より一段高いA地区の調査を主体に行った。試掘調査した結果、ほぼ東西に伸びる溝状遺構が検出され、そこから単弁8葉蓮華文軒丸瓦が出土した。この単弁8葉蓮華文軒丸瓦は白鳳様式の百済系瓦<sup>(2)</sup>で、大分市の金剛宝戒寺と同範の可能性が指摘されている<sup>(3)</sup>。従来国分寺より古い軒丸瓦や軒平瓦は知られておらず、国分寺では肥後系の瓦との関連が指摘されていたが、豊後系の瓦との関連が指摘されるようになった。軒丸瓦を葺いた建物の性格としては初期の国衙か寺院が想定されるが、今回の試掘調査では把握できなかった。

またB地区で出土した石帯の巡方は下方の長方形孔が省略され、四隅に2孔を1対とする潜り孔をあけたタイプは佐藤興治氏分類<sup>(4)</sup>の石銚帯bI類、亀田博氏分類<sup>(5)</sup>のF1類に相当する。しかし、潜り孔は貫通していない。県内の石帯としては諏訪遺跡の巡方（個人蔵）、穂北村の蛇尾（西都原資料館蔵）、三浦敏氏表採の丸靱（県総合博物館蔵）、都城市の並木添遺跡出土の丸靱が知られているのみであり、並木添遺跡以外はすべて西都市である。

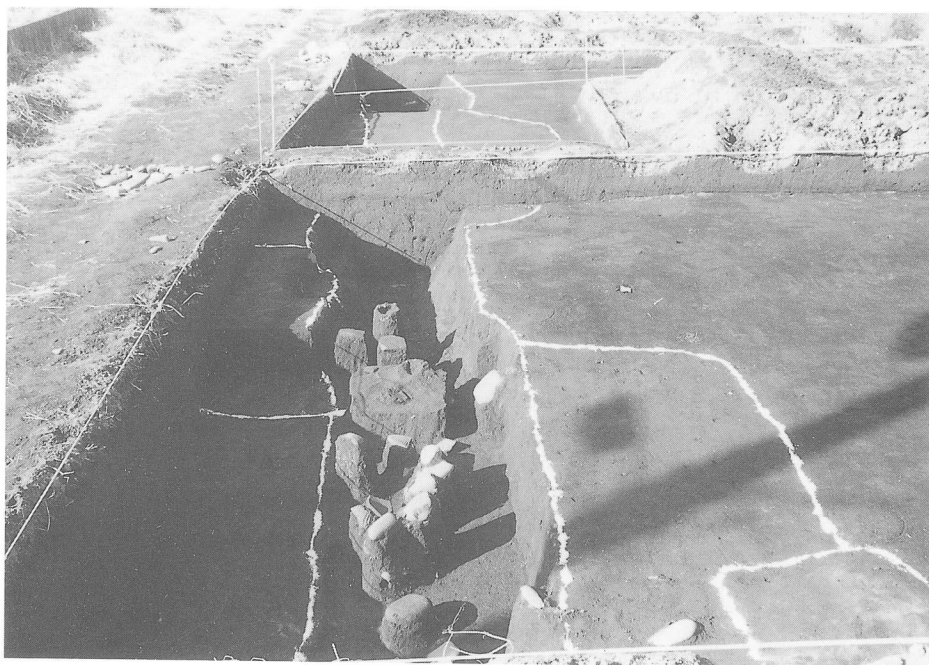
なおA地区・B地区で出土した平瓦・丸瓦とも凸面格子目瓦を主体としており、瓦の点では国衙推定地Dの東側部分は西側部分に比較して古い様相を呈していることが明確になった。この格子目瓦の窯跡については西都市内では確認されていないが、下村（佐土原町）の表採資料にはある。

特に今回紹介された西都原資料館に保管されていた妻北小学校出土の木簡は県内最初の例であり、注目されるが、第三章で詳細に述べられているのでここでは割愛する。

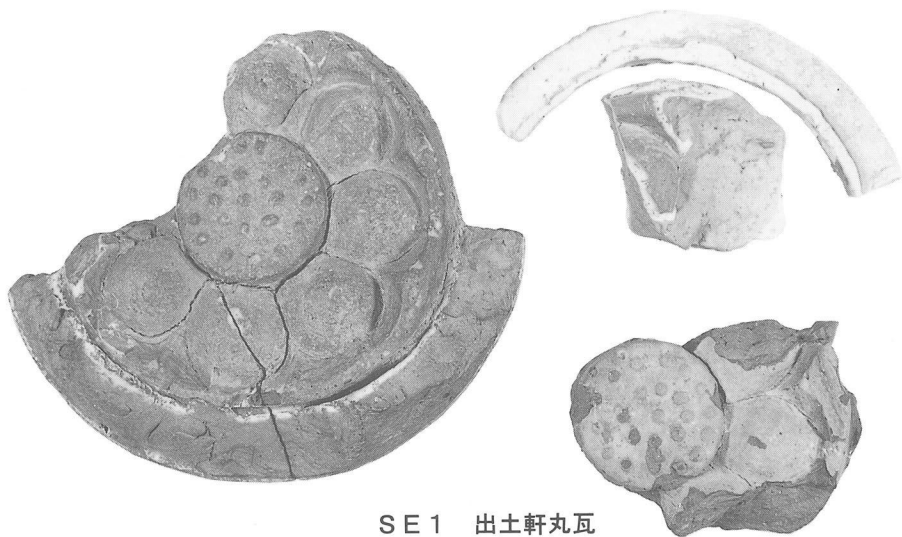
以上のように今回の試掘調査の結果、軒丸瓦・石帯などの遺物が出土したことは大きな成果であるが、国府の範囲・政庁の配置など遺構の点で不明な点が多く、今後の調査に負うことが大である。

#### 註

- (1) 西都市教育委員会「上妻遺跡他」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第14集 1991
- (2) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その一」『史淵』95 1966
- (3) 真野和夫「金剛宝戒寺」『九州古瓦図録』九州歴史資料館 1981
- (4) 佐藤興治「金属器 石銚の分類」『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 1974
- (5) 亀田博「銚帯と石帯」『考古学論叢』 1983



上妻遺跡A地区 SE 1



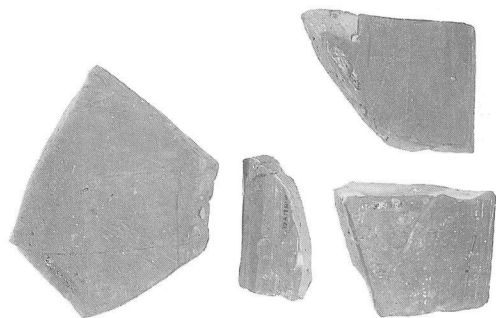
SE 1 出土軒丸瓦



上妻遺跡B地区全景



上妻遺跡A地区出土瓦



上妻遺跡B地区出土瓦



B地区出土石帯

国衙・郡衙・古寺跡等の  
範囲確認調査概要報告書 II

1993年3月

発行 宮崎県教育委員会  
編集 宮崎県教育庁文化課